様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００６５０

研究課題名（和文）漢字文化圏における漢語の語用論的標識化

研究課題名（英文）Development of Pragmatic Markers of Sino-Japanese Expressions in the Kanji Cultural Sphere

研究代表者
高橋　圭子（Takahashi, Keiko）

東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員

研究者番号：６０８６５８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：漢字文化圏における漢語の語用論的標識の発達の歴史を、日本語を中心に探究した。日中韓の共同研究の一環として、国際学術誌East Asian Pragmaticsに「其(の)実」についての論文が掲載された。また、出版社BrillによるStudies in Pragmaticsシリーズの1冊として、漢字文化圏における漢語の語用論的発達をめぐる国際共同論文集の企画が採択され、「結果」「勿論」「大体」についての研究をまとめた。さらに、日本語の「無理」の断りの反応表現の用法やプラスの意味の感嘆用法、「正直」の名詞から副詞への機能・用法の拡張を探究した。和語化に伴う配慮表現との関わりも探究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
歴史社会語用論は新しい研究分野であり、コーパス言語学の目覚ましい進展などに基づく新たな研究成果が大いに期待されている。また、漢語は、日本語において大きな比重を占めるだけでなく、漢字文化圏という個別言語を超える枠組みにおいて、言語の普遍性と特殊性の探究を可能にする。本研究はその一端を担い、漢語由来の語用論的標識の発達の歴史を探究し、日中韓の異同を明らかにすることで、言語変化の特質の解明に寄与し、学術的・社会的に貢献し得るものである。

研究成果の概要（英文）：This research project aims to explore the development of pragmatic markers originating from Chinese expressions in the Chinese Character Cultural Sphere, focusing on the Japanese language. As part of a collaborative research project with Chinese and Korean researchers, an article on the Sino-Japanese pragmatic marker “so no jitsu (its fact)” was published in the international academic journal East Asian Pragmatics. In addition, a project involving an international collected volume of papers on the development of pragmatics markers originating from Chinese expressions in the Chinese Character Cultural Sphere was accepted, to which we contributed papers on “kekka (result)”, “mochiron (no argument)”, and “daitai (generality)”. Furthermore, we have explored the pragmatic uses of the Japanese words “muri (no reason)” and “shoojiki (honesty)”, and examined politeness expressions associated with the Japanization of Chinese expressions.

研究分野：日本語学、歴史社会語用論、談話研究

キーワード：歴史社会語用論　語用論的標識　漢語　漢字文化圏　「結果」　「勿論」　「無理」　「正直」

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

歴史社会語用論（historical sociolinguistics and pragmatics）が、近年、注目を集めている。これは、人々の言語使用（language use）に関する歴史を、社会言語学（sociolinguistics）・語用論（pragmatics）の見地から探究する、言語学の一分野である。その主要な研究テーマの一つとして、語用論的標識（pragmatic marker: PM）の発達の歴史が挙げられる。語用論的標識とは、命題の内容には直接関わらないが、談話の展開や相手への態度などに関わる働きをする言語表現をいう。英語においては、“but”, “well”, “you know”など、日本語においては「でも」「だって」「あのー」などがその例として挙げられる。

さらに、日本語・中国語・韓国語といった漢字文化圏においては、「結果」「勿論」といった漢語に由来する表現で、実質的内容を持つ表現から語用論的標識に発達しているものが少なくない。そして、それぞれの歴史的プロセスや要因にはさまざまな異同が観察され、さらなる研究の進展が期待されている。

２．研究の目的

本研究の目的は次の通りである。

(1) 日本語・中国語・韓国語といった漢字文化圏における、漢語に由来する表現の語用論的標識への発達の歴史を調査し、比較する。

(2) 前項の成果に基づき、文法化（grammaticalization）・構文化（constructionalization）などに関する知見を援用しつつ分析を精緻化し、理論的考察を進める。

(3) 言語変化（language change）の普遍性と特殊性の一端を解明し、理論的進展に貢献する。

３．研究の方法

日本語・中国語・韓国語の研究者らで共同研究チームを組み、研究対象とする漢語を選定し、それぞれの語用論的標識の発達の歴史を調査することとした。具体的には、「結果」「勿論／当然」「到底／大体」「其実」といった表現を取り上げた。

本研究では日本語の「結果」「勿論」「其(の)実」について、次のような方法で研究を進めた。

・『大漢和辞典』『日本国語大辞典』をはじめとする、各種辞書の記述調査
・各種コーパス・データベースを利用した用例調査
・各用例の意味・用法の分析と、それに基づく歴史的発達の考察

研究期間がコロナ禍と重なり、国際学会・研究会への出席が困難となったが、メールやオンライン会議を利用し、共同研究チームでそれぞれの研究成果の報告と意見交換を綿密に行い、研究に支障がないよう努力を重ねた。

また、今後の国際共同研究に向け、日本語における「正直」「無理」といった表現についても、上記と同様の方法で研究を進めた。

４．研究成果

(1) 国際学術誌 *East Asian Pragmatics* Volume 6 No.3 (2021)に共同研究チームとして招待論文を掲載することができた。

本研究は、日本語における「其(の)実」について、語用論的標識／談話標識（discourse marker: DM）としての発達の歴史を探究した。その結果、この表現は 18 世紀以降 DM として用いられるようになり、19 世紀末には DM としての使用が主流になったことがわかった。韓国語における“*kisil* (其實)”, “*silsang* (實状)”などとの異同も検討することができた。

(2) 出版社Brillによる Studies in Pragmatics (SIP) シリーズの1冊として、漢字文化圏における漢語の語用論的発達をめぐる国際共同論文集の企画が採択された。論文はすでに執筆され、内部査読を経て外部査読の段階に入っている。

本研究では、日本語における「結果」「勿論」「大体」についての論究をまとめた。

「結果」は、日中韓で興味深い異同があることがわかった。日本語においては、PMとしての「結果」はプラス・マイナス両方の意味で用いられるが、「結果を出す」といった表現においてはプラスの意味を持つ。中国語・韓国語においては、逆に、マイナスの意味を持つこともあり、中国語においては予想外の意味も加わる。14世紀頃の中国語の「最終局面に至る；死ぬ」という意味が共通の起点にあると考えられるが、その後の発達の相違の要因は今後の探究課題である。

「勿論」は、現代日本語においては単独で反応表現（**reactive expression**）としての用法が発達していることが明らかになった。韓国語においても「勿論」は語用論的標識として用いられている。一方、中国語においては「勿論」はすでに古語となり、日韓の「勿論」と類似する意味・用法を持つ表現としては「当然」が用いられていることがわかった。

「大体」は、日本語における語用論的標識としては相手を非難する発話の頭部（**utterance-initial**）で用いられる。類似の表現として、韓国語では “***(to)taychey*** **(**都**)**大體”、中国語では “***daodi*** 到底”が用いられており、それぞれの発達の歴史を探究した。

(3) 日本語における「無理」は、「理に合わない」の意から「不可能」の意へ、そして断りの反応表現としての機能を発達させている。語用論的標識の中でも反応表現の用法を持つものとして、「勿論」「無理」「了解」「是非」「微妙」などがあり、さらなる探究が望まれる。また、現代においては「無理」に意味の上昇が見られ、プラスの感情の高まりを表す感嘆表現の用法が注目される。

(4) 日本語における語用論的標識としての「正直」の発達の歴史を用例に基づき検証した。予想としては、「正直に言うと」＞「正直言うと」＞「正直」といった過程を想定していたが、結果はこれほど単純なものではなかった。接辞「に」の有無の歴史については「実際」「相当」「随分」といった漢語とも比較しつつ、さらなる探究が必要なことが明らかになった。

(5) 漢語の語用論的標識化は、和語化の一環と考えられ、対人関係にまつわる配慮表現の変化とも関わりを持つ。例えば、東京圏の大学生を対象とした依頼表現の調査では、漢語「可能」を用いた表現が適切と判断されていることがわかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　14件）

１．著者名 東泉 裕子・髙橋 圭子	４．巻 15
２．論文標題 依頼表現としての「ていただきたいです」　―若年層による適切度判定―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 東泉 裕子・髙橋 圭子	４．巻 1
２．論文標題 近現代語における「もちろん」の用法	５．発行年 2023年
３．雑誌名 言語資源ワークショップ発表論文集 = Proceedings of Language Resources Workshop	６．最初と最後の頁 275～282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003743	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 髙橋圭子・東泉裕子	４．巻 14
２．論文標題 レル敬語をどのようにご指導されていますか―現代日本語コーパスに探る尊敬語の形式―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル	６．最初と最後の頁 35～43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 髙橋圭子・東泉裕子	４．巻 16
２．論文標題 「結果」の語史	５．発行年 2022年
３．雑誌名 コミュニケーション文化	６．最初と最後の頁 57～69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 髙橋 圭子・東泉 裕子	4．巻 23
2．論文標題 語用論的標識としての漢語「無理」の歴史	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要 = The Bulletin of the Institute of Human Sciences, Toyo University	6．最初と最後の頁 53～74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34428/00012355	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 髙橋圭子・東泉裕子	4．巻 15
2．論文標題 大学生の依頼メールにおける配慮表現	5．発行年 2021年
3．雑誌名 コミュニケーション文化	6．最初と最後の頁 83-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 髙橋圭子・東泉裕子	4．巻 13
2．論文標題 配慮を理解していただきたいです―新旧の依頼表現に対する若年層の適切度判定―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル	6．最初と最後の頁 36-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 東泉 裕子・髙橋 圭子	4．巻 6
2．論文標題 現代日本語における漢語「正直」の副詞用法	5．発行年 2021年
3．雑誌名 言語資源活用ワークショップ発表論文集 = Proceedings of Language Resources Workshop	6．最初と最後の頁 249～258
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003499	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuko Higashiizumi and Keiko Takahashi	4．巻 6-3
2．論文標題 The emergence of the discourse marker sonojitsu 'in fact' in Japanese	5．発行年 2021年
3．雑誌名 East Asian Pragmatics	6．最初と最後の頁 355-379
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1558/eap.20996	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 髙橋圭子・東泉裕子	4．巻 14
2．論文標題 ヘッジとしての「もちろん」の歴史	5．発行年 2020年
3．雑誌名 コミュニケーション文化	6．最初と最後の頁 43-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 髙橋圭子・東泉裕子	4．巻 22
2．論文標題 語用論的標識としての「勿論」の歴史	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6．最初と最後の頁 197-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34428/00012023	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 東泉裕子・髙橋圭子	4．巻 12
2．論文標題 現代日本語における「もちろん」のヘッジ用法	5．発行年 2020年
3．雑誌名 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル	6．最初と最後の頁 26 - 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 髙橋圭子・東泉裕子	4．巻 5
2．論文標題 コーパスに見る漢語「無理」の歴史	5．発行年 2020年
3．雑誌名 言語資源活用ワークショップ2020発表論文集	6．最初と最後の頁 196 - 208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003160	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 髙橋圭子・東泉裕子	4．巻 23
2．論文標題 語用論的標識としての漢語「無理」の歴史	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6．最初と最後の頁 53-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuko Higashiizumi and Keiko Takahashi	4．巻 20
2．論文標題 The development and use of mochiron as a pragmatic marker in Japanese.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本認知言語学会論文集	6．最初と最後の頁 483-488
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 髙橋圭子・東泉裕子	4．巻 12
2．論文標題 「視聴解」を中心とした聴解授業の試み ―教養としてのアカデミック・ジャパニーズ教育を目指して―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル	6．最初と最後の頁 54-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 東泉裕子・髙橋圭子
2．発表標題 配慮を理解していただきたいです／のですが－依頼表現としての適切度－
3．学会等名 第58回 アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会
4．発表年 2023年

1．発表者名 東泉裕子・髙橋圭子
2．発表標題 近現代語における「もちろん」の用法
3．学会等名 言語資源ワークショップ2022
4．発表年 2022年

1．発表者名 東泉裕子・髙橋圭子
2．発表標題 現代日本語における漢語「正直」の副詞用法
3．学会等名 言語資源活用ワークショップ2021
4．発表年 2021年

1．発表者名 髙橋圭子・東泉裕子
2．発表標題 コーパスに見る漢語「無理」の歴史
3．学会等名 言語資源活用ワークショップ2020
4．発表年 2020年

１．発表者名 東泉裕子・髙橋圭子
２．発表標題 現代日本語における反応表現としての漢語「無理」
３．学会等名 NINJAL国際シンポジウム 「第11回 日本語実用言語学国際会議（ICPLJ11）」（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 髙橋圭子
２．発表標題 中古和文における聞き手配慮の敬語使用
３．学会等名 第4回HiSoPra研究会(歴史社会言語学・歴史語用論研究会)
４．発表年 2021年

１．発表者名 Reijirou Shibasaki and Keiko Takahashi
２．発表標題 From a unit of time in temporal axis to a discourse marker in a contextual-spatial axis: The case of shunkan (瞬間) ‘(at the) moment’
３．学会等名 The 18th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Yuko Higashiizumi and Reijirou Shibasaki
２．発表標題 From truth to truly: The case of shin-ni 真に ‘truly’ in Japanese
３．学会等名 The 18th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 東泉裕子・髙橋圭子
２．発表標題 近代語のコーパスに探る尊敬語の形式
３．学会等名 日本近代語研究会　第400回大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 ナロック・ハイコ、青木博史 編	４．発行年 2023年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 -
３．書名 ひつじ研究叢書（言語編）第196巻 日本語と近隣言語における文法化	

１．著者名 ジョナサン・カルペパー、マイケル・ホー（著）　椎名美智（監訳）加藤重広、滝浦真人、東泉裕子（訳）	４．発行年 2020年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 386
３．書名 新しい語用論の世界：英語からのアプローチ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	東泉　裕子 (Higashiizumi Yuko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関